UTILITARIANISM

サンプル版
Sample

功利主義論

J. S. ミル

奥田伸一［訳］

満たされた豚より…満たされないソクラテスの方がよい。

天才ミルによる最強の倫理学説

功利主義の教典（バイブル）

過去の翻訳全12点を参照し見直した

決定版的新訳!!

旧訳の誤訳を指摘した「訳者覚え書」も収録
既に読まれた方も是非再読を

この電子書籍は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

凡例

本書は、John Stuart Mill *Utilitarianism* の全訳である。底本として著者生前の最終版である、以下の第四版を使用した。

John Stuart Mill, *Utilitarianism*, 4th ed. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1871.
オンラインに公開されているもの：https://catalog.hathitrust.org/Record/011538760

『功利主義論』は、一八六一年にフレイザーズマガジン誌に分割掲載され、のちに書籍化された。生前に、初版（一八六三年）、第二版（一八六四年）、第三版（一八六七年）、第四版（一八七一年）と版を重ねた。この間いくつかの加筆修正が行われており、この点、トロント大学版『ミル著作集』（*Collected Works of John Stuart Mill*, 33 vols, ed. F. E. L. Priestley and J. M. Robson, Toronto and London: University of Toronto Press and Routledgge, 1963-91 https://oll.libertyfund.org/title/robson-collected-works-of-john-stuart-mill-in-33-vols　『功利主義論』は第10巻に収録）に詳しいため、これを参照して、特に大きな修正については本翻訳中にも示した。

本文中において、（　）は原文にあるまま、原著者の注記・補説であり、〔　〕は訳者の判断で付加した注記・補訳である。

原文で、強調のためにイタリック体になっている部分は、傍点に置き換えた。

原文中のラテン語表記箇所については、《最高善 *summum bonum*》というように、日本語訳に続けて記載しているが、*à priori* のみ「先天的（ア・プリオリ）」と表記している。

訳出に際し、多くの既訳を参照させていただいた。深く謝意を申し上げたい。本邦で過去出版された『功利主義論』の翻訳については、既訳一覧にまとめた。また既訳との比較や翻訳上の疑問点などについて、訳者覚え書にまとめた。

訳註は人名など最小限にとどめてある。訳出に関する込み入った話題は、これも訳者覚え書を参照してもらいたい。

功利主義論

J・S・ミル　著
奥田伸一　訳

目次

凡例
第一章　総説
第二章　功利主義とは何か
第三章　功利性原理の究極的な拘束力について
第四章　功利性原理の論証方法について
第五章　正義と功利性の関係について
訳註
既訳一覧
訳者覚え書

第一章　総説

人間知識が、ここまで培われるあいだ、ことのよしあしの基準についての論争に、決着をつける試みは、ほとんど進歩していない。このことほど、期待外れなことは、そうそうなく、このことほど、未解決の重要課題が山積し、思索の停滞が明らかなことを示すものは、そうそうない。哲学の夜明けから、《最高善 *summum bonum*》に関する問い、あるいは、道徳の基礎に相当するものは何かという問いは、哲学者たちの中心問題と説明されてきた。そして、最も才能ある知性たちを虜にし、相互の活発な論争を通して、党派や学派へと分断してきたのである。ところが、二千年以上たっても同じ議論が続き、哲学者たちは、同じ論争の旗を掲げて、いまだに陣取っている始末である。（もし、プラトンの対話編が、本当の会話に基づいているのなら）若きソクラテスが、長老プロタゴラスの説を聞き、当時人気のあった、いわゆるソフィストの道徳論に対抗して、功利主義の理論を主張したとき以来、思想家もそのほかの多くの人々も、この問題について合意に近づいているとは思っていない。

実は、あらゆる科学の第一原理において、同じような混乱と不確かさ、そして、ある場合には、同じような対立が存在しており、最も確証的な科学だとされる数学でさえ、例外ではない。それにもかかわらず、科学的結論の信頼性の多くは、損なわれていないし、事実、世間では、

まったく損なわれていない。一見すると、奇妙なことだが、それは、次のように説明される。科学の細部の学説は、普通、第一原理と呼ばれるものを根拠として推論されるのではなく、第一原理から導かれるのでもない。もしそうでなければ、科学は、もっと不安定であるだろうし、代数学ほど、証明不十分な結論を持つ科学はないことになる。というのは、代数学は、学習者が一般に、諸原理として教わることから、確証性を得ているのではないのである。最も著名な教師たちの何人かが言明しているように、代数学はイングランド法のように擬制に満ち、神学のように神秘に満ちているからである。究極的に科学の第一原理として認められている真理とは、実はその科学に深くかかわりのある基本的な概念を経験的に得て、形而上学的に分析した最終結果に過ぎない。また、科学とそうした第一原理との関係は、建物における土台ではなく、樹木における根である。樹木の根は掘り返されるまで、決して日の目を見ないけれども、建物の土台と同じ役割をしっかり果たしている。しかしながら、科学においては、個々の真理は一般的な理論に先行するとしても、たとえば、道徳や立法といった実践的な技術については反対であることが、予想されるだろう。すべての行為は、なんらかの目的を目指している。だから、そうした目的によって、行為の指針に、全般的な性格を与え、色づけしなければならないと考えることは当然であろう。われわれが何かを追求するとき、追求するものの明白で正確な概念は、最初に必要とするものであって、われわれが最終的に待ち望むものではないと思われる。

倫理に関するよしあしの判定とは、個人が考え、何が正しくて何が間違いであるかを確かめるための、手段であるべきであって、すでに確かめられた結果ではない。

倫理に関するよしあしを直観させる感覚や本能といった自然的能力があるのだ、という世間に受けがいい理論に頼ったところで、倫理に関する良し悪しの判定の難しさが、回避されるわけではない。というのは――道徳的な本能が実在するかということ自体が、争点のひとつであることは別にしても――そういう理論の信奉者の中で、哲学の素養を持つ者ならば、光や音を識別する感覚が現にあるように、個別具体的に何が正しくて何か正しくないかを識別する感覚があるという考えを放棄しなければならなかったからである。およそ思想家の名に値する解釈者に従えば、われわれの道徳能力は、道徳的判断の一般原理だけを提供する。道徳能力は理性の一部門であって、感覚能力の一部門ではない。したがって道徳能力は道徳の抽象的な原則と見なすべきであり、具体的な認識と見なすべきではない。直観主義も、あるいは帰納主義と称する倫理学派も、一般的な原理の必要性を主張する。両者とも、個々の行為の道徳性は、直接的な知覚の問題ではなく、個別的な状況への原理の適用であるということに同意している。彼らは大枠で認識を同じくし、同じ道徳律に負っている。しかし論拠や彼らが権威として扱っている根拠は異なる。一方の意見〔直観主義〕によれば、道徳の原理は、先天的（ア・プリオリ）に明らかであり、用語の意味を理解することを除けば、何の同意もいらない。もう一方の意見〔帰納主義〕によれば、倫理に関する良し悪しとは、真偽と同様に、観察と経験の問題である。しかしいずれも同じよ

うに、道徳性は原理から推論されなければならないと考えている。そして直観主義も帰納主義も同じくらい強く、道徳の科学があるということを断言する。それにもかかわらず、彼らはめったに、科学の前提として役立つであろう先天的な原理のリストを築き上げようとはしない。それどころか、さまざまな原理をひとつの原理に、あるいは義務を共通の基礎にまとめる努力をすることすらめったにないのである。両者とも、先天的な権威として、道徳の一般的な教訓を仮定したり、そうした格言の共通の根拠として、格言そのものよりも権威がなく、およそ大衆に承認されたことのない一般論を持ち出したりする。けれども、そうした主張を支持するには、両者とも、あらゆる道徳の根源として、何らかの単一の基本原理や法則を示さねばならず、それがもし複数あるのなら、その中で優先順位をつけるべきである。ひとつの原理、あるいはさまざまな諸原理が対立するときに、その選択を決定する法則は、自明でなければならない。

こうしたことを欠いたことによる悪しき効果が、実際上、どれくらい改善されてきたか、あるいは人類の道徳的な信念が損なわれてきたか、また究極的な標準が明証されないことによって、どのくらい確信が持てないようになってきたかを調べるには、古今の倫理学説を徹底的に調査し吟味しなければならないだろう。けれども、道徳的信念が備え達成してきた安定性や一貫性を示すのは容易なことである。なぜなら、主として〔功利性原理という〕認識されない基準による暗黙の影響があったのだから。明証的な第一原理の不在によって、倫理学は、人間の現実的な心情を神聖化するだけで、指針を示すことがないものとなった。それでもまだ、人間の心

情は、好感も反感も、物事が幸福に及ぼす影響があることを支持することで、大きな影響を受けている。だからこそ、功利性原理、あるいは後年のベンサムが呼ぶところの「最大幸福の原理」は、道徳的な原理の形成において、最も権威を軽蔑して拒絶している人々にさえも、広く支持を得ているのである。功利性原理は道徳の基本原理であり、道徳的義務の根源であるということを認めない学派であろうと、道徳の各論の多くにおいて、幸福についての行為の影響を、最も本質的であり、最も考慮すべきものであるとしている。さらに言うならば、少しでもそれを議論することが必要だと判断する限り、先天的な道徳論者であろうと、功利主義者の議論を無視することはできないのである。これらの思想家を批評することは、私の現在の目的ではない。しかし実例として、その中で最も影響力のある、カントの系統的な著作『人倫の形而上学の基礎づけ』[1]に言及しないわけにはいかない。カントの思想体系は、哲学史上の道標のひとつとして、長く残るであろうが、この非凡なる人物は、先の論文の中で、道徳的義務の起源と基礎として、普遍的な第一原理を設定している。それはこうである。「汝の行動がすべての理性的存在者によって法則として採用されるように行動せよ」。しかし、この格言から具体的な道徳的義務を推論し始めるとき、ほとんど奇怪にもカントは失敗する。なぜなら、すべての理性的存在者が、無謀にも不道徳な行為規則を採用することが、論理的に（物理的にとは言わないまでも）不可能であり、背理となることを示せていないからである。カントが示しているのは、

そのようなものを採用した結果は、誰ひとり陥ることを選択しないようなことである、ということでしかない。

ここではこれ以上、ほかの理論家について議論するのはやめて、功利主義、あるいは最大幸福原理についての理解と評価について、またできる限りの証明について、わずかでも貢献しようと試みる。この証明は、一般的に世間で言われている意味での証明とはいえないことは明らかである。究極的な目的についての問題は直接的な証明を素直に受け入れないものだ。善いということを証明するには、証明抜きで善いということを認められるものの手段であることを示さなければならない。たとえば医療技術は、それが健康を導くということによって、善いということを証明される。しかしどうやったら健康であることが善いということを証明できるか。音楽芸術が善いものであるのは、とりわけ、それが快楽を生み出すからである。しかし快楽が善いものであるということは、どうしたら証明できるか。だからもし、それ自体、善いというすべてのものを含む包括的な公式があり、これ以外のものすべては目的ではなく手段であると主張するならば、その公式は承認したり拒絶したりできるが、一般的な意味での証明の対象ではない。だからといって、われわれは、そうした公式を承認するか拒絶するかは、盲目の衝動や恣意的な選択によるものだとは考えない。しかし、証明という言葉には広い意味があり、その意味でなら、この問題は、ほかの哲学的問題についての議論と同じように、証明することができる。この問題は理性的能力の認識の範囲内であり、理性は直観としてだけこの問題を扱う

わけではない。考察を示すことによって、知性がその原則に同意するか否かを決定できるだろう。そしてこれは証明に相当する。

このような考察がどんな性質のものであるか、それがどのような方法をもって個々のケースに適用されるか、したがってまた、功利主義的な公式を承認したり拒否したりするためには、どんな合理的な根拠が与えられるのかについて、これから検討しよう。しかし、合理的に承認したり拒絶したりする予備的な条件として、その公式が正確に理解されていなければならない。私は、一般的に、功利という言葉の意味がとても不完全な概念として形成されており、承認を妨げる主要な障害になっていると思う。せめて大きな誤解だけでも取り除くことができれば、問題は非常に単純化され、その困難の大部分はなくなってしまうだろう。従って功利主義的な基準に同意を得るための哲学的な議論に入る前に、〔次章において〕この原理そのものについて、いくつかの説明を加えておこう。功利主義が何であり、何でないのかを区別し、より明瞭に示すことによって、功利の解釈に関する誤解に基づいた、あるいは誤解と密接に関連した実際の反対論に対処したい。このように準備することによって、後で〔第三章以下で〕、私が哲学理論のひとつと考えているこの問題に、できる限りの光を当てよう。

第二章　功利主義とは何か

単純に功利という言葉の語感から、ことのよしあしの判断において功利主義を支持する人々が、功利を快楽に反する意味に制限して使っていると考える無知なる誤りについては、一言触れておけば十分である。功利主義に対する哲学上の反対者は、一瞬でさえ、このような馬鹿らしい誤解を招きかねない人々と混同されただけでも、釈明を要するだろう。その反対からの批判が、すべてのものを快楽に、とりわけその最も下品なものに関連させるというものであり、それがもうひとつの功利主義に対するありふれた非難であることを考えると、この誤解はいっそう特異なものであることがわかる。ある有能な著述家によって鋭く指摘されているように、同じような人物が、時としてまさに同じ人物が「快楽とは功利のことだと説明されると、功利主義は冷血で誰にも実践できないといい、功利とは快楽のことだと説明されると、功利主義は官能的で誰にでも安易に実践できてしまうといって」[2]功利主義を非難するのである。この問題について少しでも知識のある人々ならば、エピクロスからベンサムまで、功利主義を支持するすべての著述家は、功利という言葉によって、快楽から区別された何かではなく、快楽そのものを、あるいは苦痛の排除を、意味することを承知している。そしてまた、〔音楽や芸術の〕心地よさや華麗さといったものには有益性がないなどとは決していわず、数ある中でとりわけ、

そういったものが有益性を意味するのだといつも断言してきた。それにもかかわらず、著述家たちを含めて、一般の人々は、新聞や雑誌においてだけでなく、重厚な大著においてさえも、絶えずこの浅はかな誤りを犯している。功利主義的といえば、その発音以外については何も知らないくせに、美しさや華麗さ、おもしろさといった種類の快楽を拒否したり無視したりするのが功利主義的だと、彼らはいつもうそぶいている。それだけでなく、この用語の単に無知による誤用は、非難の時だけでなく、時として賛辞としてもみられる。まるで、功利的といえば軽薄さや単なる一時的な快楽に対して優越した意味であるかのように。そして、この異常な用法は、人口に膾炙している唯一のものであり、また若い世代がその意味のただひとつの概念として理解しているものである。独特の名称としてこの言葉を使い始めながら、長年にわたり使うのをやめていた〔私のような〕者であっても、この言葉を取り入れた人々が、功利的なることを、劣化から救済するために少しでも貢献しようと思うならば、喜んでこの言葉を使うだろう。〔＊原註1〕

〔＊原註1〕

本稿の著者は、自分が功利主義者を名乗った最初の人物であると考えている。この語は私の独創ではなく、ゴールト氏(3)の『教区年代記』のちょっとした記述から採用したものである。私は友人たちとともに、数年間、功利主義者を名乗っていたが、党派性を示すしるしか、合言葉と化してしまうことを嫌って放棄してしまった。しかし一派の意見ではなく、ひとつの単なる意見の名称というのなら、あるいは、なんら特殊な適用方法を示す

のではなく、功利の基準を認めることを示すためなら、その用語は言葉の不足を満たし、多くの場合、退屈で冗長な言い回しを避ける便利な方法を提供してくれる。

功利性あるいは最大幸福原理を、道徳の基礎として受け入れる信条に従えば、行為は、幸福を増大することに比例して正しく、幸福の逆を生むことに比例して間違っていると考えられる。幸福が苦痛の欠如と快楽を意味し、不幸が快楽の欠如と苦痛を意味する。この理論に基づいた道徳の基準について、明瞭な見方を与えるには、さらに多くのことを言わなければならない。特に、苦痛と快楽の観念にどんなものが含まれるのか。また、未解決の問題はどの程度残っているのか。しかし、そうした補足的な説明は、この道徳の理論の土台に位置する人生観すなわち、苦痛からの解放と快楽は、目的として望ましいただひとつのものである、ということに影響を及ぼさない。そしてまた、すべての望ましいもの（それは功利主義においても他派と同じくらい多くある）は、それ自体に固有の快楽のために、あるいは快楽の促進と苦痛の防止の手段として、望ましいということに影響しないのである。

ところで、このような人生観は多くの人々の気持ちを逆撫でし、とりわけ感情や意図において、最も尊敬に値する人々に、根深い嫌悪の念を抱かせている。（そうした人々に言わせると）人生には快楽よりもさらに高級な目的はないと考えること――欲求と追求の対象として、快楽よりよく、より高貴なものはないと考えること――を、まったく下劣で卑しく、豚にこそふさわしい原理であると指摘する。豚とは、大昔にエピクロス派の人々が軽蔑して、たとえられた

ものであった。そして、現代においてその原理を抱く者は、時としてドイツ、フランス、イギリスの攻撃者から、相も変わらぬ上品なたとえの対象となっている。

そのような攻撃を受けたとき、エピクロス派の人々はいつもこう答えてきた。人間の本性を堕落の光の下に照らしたのは、われらではなく糾弾者たちの方ではないか。そうした非難は、豚が享受する以外の快楽を、人間には享受できないと考えているのだから。もしこの仮定が正しいのなら、先の糾弾に反論できなくとも、それはもはや、そしりではなくなるだろう。というのは、快楽の源が人間と豚とにおいて、まったく同じものであるのならば、一方にとって十分に善い人生の指針は、もう一方にとっても十分に善いものということになろう。つまりエピクロス派の生活と獣のそれとの比較は、まさに獣の快楽が人間の幸福の概念を満たさないが故に、品位を落とすと感じられるのである。人間は、動物的な欲求よりも高級な能力を持っている。いったん、それを意識したなら、それを満たさない限り、幸福とは見なされない。実際のところ、私は、功利の原理から、結論となる学説を引き出すことにおいて、エピクロス派にいかなる意味でも誤りがなかったとは考えない。これを十分な方法とするには、キリスト教的な要素と同様に、大部分ストア派的な要素を含まなければならない。けれど、エピクロス派の人生論として知られているものに、知性や感情、想像力または道徳感情といった快楽が、単なる感覚よりも非常に高い価値として、割り当てられていなかったわけではないのである。しかしながら、一般に功利主義の著述家は、主として、大いなる永続性や安定性、低コストの面など

において――すなわち、内的な本性であるよりもむしろ外的な利点において――肉体的快楽よりも精神的な快楽を優位に置いていたことを、認めなければならない。これらの点すべてにおいて、功利主義者は自分たちの立場を十分に証明してきた。しかし功利主義者は、全体の一貫性を失わず、別のことも、しかも高級と呼ばれるようなことも取り入れることができたはずである。ある種類の快楽は別の種類の快楽よりも望ましく価値があるという事実を認めることは、功利性原理とまったく矛盾しない。ほかのものを評価するときはいつも、質は量と同じように考慮されるのに、快楽の判断は量だけに依存して考えられなければならないというのは不合理だろう。

快楽における質の違いが意味するものとは何か、あるいは、量が多いということではなく単に快楽として、ほかのものより価値がある快楽を構成するものとは何かと、もし私が尋ねられたなら、可能な回答はひとつしかない。ふたつの快楽に関して、両方を経験したことがある人々の全員またはほとんど全員が、何らかの道徳的義務の感覚にとらわれることなく、はっきりとした選好を示すのなら、それこそがより望ましい快楽である。両方の快楽に十分に精通している人々によって、もしふたつのうちひとつが、一方よりも非常に高く評価されるのなら、たとえ大きな不満が伴われることを知っていたとしても、またたとえ、他方のいかなる量の快楽の可能性を止めることになろうとも、量よりもはるかに重視されるために、ほとんど問題にならず、比較の上、選好された享楽の質に負うのは当然である。

ここで、両方の快楽に等しく精通しており、等しく享受し楽しむ人々が、自らの高級な能力を要する生活の方を最優先に選択することは、疑いのない事実である。獣の快楽を十分に与えられることが約束されたとしても、何か下等な生物になろうと思う人はまずいないだろう。たとえ自分たちの運命よりも、愚か者や馬鹿、ならず者といった人々の方が、もっと満たされた運命にあることを知ったとしても、知的な人間は、愚か者になりたいと思わないだろうし、教育のある人は、無知な人になろうとしないだろう。親切で良心的な人は、利己的で下劣になろうとしないだろう。こういう人々は、愚か者と同じくらいに、すべての欲求をまったく完璧に満たされたとしても、現在愚か者よりも多く所有しているものを放棄しないだろう。もしこういう人が放棄するようなことがあるとすれば、彼らから見てどんなに望ましくなかろうと、別の者と運命を交換するほかに、逃れようがないくらいに、極端に不幸な場合だけであろう。高級な能力を持つ者が幸福になるのには、多くのものを必要とし、おそらくより苦悩に敏感となり、劣った者たちよりも、多くの点で、成し遂げがたいものとなる。これらの負担にもかかわらず、そうした者は、決して実際には低級の生活と考えるものに陥ることを望まない。こういった不本意を好むことを何とでも解説できよう。たとえば、われわれは、それを自尊心に帰することができる。自尊心とは、人間が持つことのできる、最も尊敬すべき感情であるとともに、最も尊敬すべからざる感情に、善悪の境なく与えられた名称である。われわれは、それを自由や独立心の渇望に準えることもできよう。こういうものに訴えることは、ストア派にとって、

その不本意なるものを教え込む最も有効な手段のひとつであった。また権力に対する渇望、あるいは感動に対する渇望に準えることもできよう。こうしたものは実際に、不本意なるものに入り込み貢献する。しかし、その最も適切な呼び名は、尊厳という感覚である。すべての人間が何らかの形で尊厳の感覚を持っており、決して正確にではないが、高級な能力と比例している。そしてこの感覚の強い者にとっては、これと衝突するものは、一時的でなければ、欲求の対象となりえないほどに、幸福の不可欠な一部となっている。

こうした選好が幸福の犠牲の下に起こると考える者は――同じような状況の下で、優れた者は劣った者よりも幸福ではないと考える者は――幸福と満足というふたつの異なる概念を混同しているのである。感受能力が低い者が、十分な満足を得る機会に大いに恵まれているのは、明らかである。感受能力が非常に恵まれた者は、いつも、彼が求めるいかなる幸福も、この世界では不完全なものでしかないと考えるだろう。しかし、彼は、もしそれらが耐えうるものであるならば、その欠陥に耐え忍ぶことを学習できる。それにもかかわらず、彼は、まったく欠陥に気づいていない者に対して、嫉妬しないだろう。なぜなら単に、そういう者は欠陥とされるものの利点を考えたことがないのだから。満たされた豚よりも満たされない人間の方がよく、満たされた愚か者よりも満たされないソクラテスの方がよい。そして愚か者なり豚なりが、もしこれと異なった意見を持ったとしても、それは彼らがただ自分の側の問題しか知らないからである。これを比較する者はその両方を知っている。高級な快楽を享受できる多くの人々も時

折、衝動の影響を受けて、低級なものの方へ走ることがあるではないか、と反論されるかもしれない。しかし、これは、高級な快楽についての本質的な優越性に対する全面的な評価とまったく矛盾しない。人はしばしば、性格の欠陥から、それにはあまり価値がないと知っていても、目先の利益を選択してしまうことがある。これは肉体的快楽と精神的快楽との間だけでなく、ふたつの肉体的快楽の間での選択でも起こることである。健康が大いに善いものであると熟知していようと、健康を損なってでも官能的な耽溺を求めたがる人々はいるだろう。

本章の以降のページはサンプル版に含まれません。

第三章　功利性原理の究極的な拘束力について

このページはサンプル版に含まれません。

第四章　功利性原理の論証方法に関して

このページはサンプル版に含まれません。

第五章　正義と功利の関係について

このページはサンプル版に含まれません。

訳註

（1）原文では *Metaphysics of Ethics* であり、通常は『人倫の形而上学』（『道徳形而上学』ともいう）を指すが、当時はこの表題で『人倫の形而上学の基礎づけ』（『道徳形而上学原論』ともいう）が出版されており、内容的にもこちらを指すとするのが一般的である。

（2）引用元は、ウェストミンスター評論に掲載された、『エピキュリアン』（トマス・ムーア著）の書評論文（"Moore's Epicurean," *Westminster Review*, vol.8 October 1827）。無記名記事のため「ある有能な著述家」とされているが、これはトマス・ラブ・ピーコック（Thomas Love Peacock, 1785-1866）によるもので、彼の著作集にも収録されている（*The works of Thomas Love Peacock*, ed. H. F. B. Brett-Smith and C. E. Jones, 10 vols. 1924–34, vol.9）。ピーコックは、ミルの父ジェームズの後任で東インド会社の文書審査部長を務めた人物で、彼の後任でミルが同職に就いた。

（3）ジョン・ゴールト（John Galt, 1779-1839）はスコットランドの小説家。『教区年代記』は、正式名称『教区年代記：あるいは、ミカ・バルウィダー牧師の任期中に、彼自身によって書かれたダルメーリングの記録』（*Annals of the parish: or, The chronicle of Dalmailing; during the ministry of the Rev. Micah Balwhidder, written by himself*）といい、自伝形式をとってはいるが、ゴールトによって書かれた小説である。ちなみにアイン・ランドの小説『肩をすくめるアトラス』に出てくるジョン・ゴールトとは無関係。

既訳一覧

このページはサンプル版に含まれません。

訳者覚え書

奥田伸一

ここでは訳者覚え書として、本翻訳と既存の翻訳とで特に異なる訳出を行っている箇所を具体的に摘示し、訳者なりの弁明を行いたい。なお、ここでは基本的に、現在手に入りやすく、出版年の新しい次の二書を対象とし、異なる訳出箇所を取り出した。この二書以外の既存の邦訳については、適宜、同箇所についてのみ検討箇所として参照している。またパラグラフの番号は、本翻訳が底本とした第四版に依拠している（パラグラフの分け方は『ミル著作集』収録版と同じ）。このため、別の原著や別の版、独自の改行を行っている訳書とは若干ずれる場合があるので注意されたい。

【関口訳】……関口正司訳『功利主義』（岩波文庫、二〇二一年）

【川名山本訳】……川名雄一郎・山本圭一郎訳「功利主義」（『功利主義論集』所収、京都大学出版会、二〇一〇年）

以上の二書以外では次のものを参照・引用した。また引用に際し、原文の旧字体を新字体に改めた。

【伊原訳】……伊原吉之助訳「功利主義論」（『世界の名著38　ベンサム　J・S・ミル』所収、中央公論社、一九六七年）

【水田永井訳】……水田珠枝・永井義雄訳「功利主義」（『ワイド版　世界の大思想III-6　ミル』所収、河出書房新社、二〇〇五年）

【和田訳】……和田聖嗣訳『功利主義』（福村書店、一九五四年）

【柳田訳】……柳田泉訳『功利論　改訳版』（春秋社、一九三七年）

【富田小倉訳】……富田義介・小倉兼秋訳『ミル功利説』（培風館、一九三五年）

【高橋穣訳】……高橋穣訳『ミル功利主義』（岩波書店、一九三五年）

【高橋久則訳】……高橋久則訳「功利主義」『世界大思想全集 24』（春秋社、一九二八年）

【河野密訳】……河野密訳「功利主義」（『コント実証哲学：附・功利主義論』所収、而立社、一九二三年）

次の二書は明治時代に出版された古い文献であり、私の研究不足のために判読・読解が不十分なところもあって、引用に際しても、使用されている述語等について解説を要すると思われ

るところが多い。このため、参照はしているが、特別の場合を除いて、基本的に言及・引用していない。

澁谷啓蔵訳『利用論』（山中市兵衛、一八八〇年）
西周訳『利学』（島村利助、一八七七年）

初めて使った？

第二章　第１パラグラフの原註

最初に取り上げるのは、第二章の第1パラグラフに付された註である。まず伊原吉之助訳を参照してもらいたい。

【伊原訳】本論の著者は、この功利主義的という言葉を使いはじめた人間だと信じる理由をもっている。自分で考え出したのではなく、ゴールト氏の『教区年代記』の一節から採用したのである。数年間、この語を主義の呼び名として使ってみてから、**彼**と友人たちは、党派を示す記章や合いことばのたぐいに嫌気がさして放棄した。〔強調傍点引用者〕

さて、ここでいう「彼」とは誰のことだろうか。この訳文からだと私はゴールト氏のことかと思うのだが。

【原文】The author of this essay has reason for believing himself to be the first person who brought the word utilitarian into use. **He** did not invent it, but adopted it from a passing expression in Mr. Galt's Annals of the Parish. After using it as a designation for several years, he and others abandoned it from a growing dislike to anything resembling a badge or watchword of sectarian distinction.〔強調引用者〕

この文章には二回「彼」が出てくる。一回目の「彼」が、The author of this essay（本論の著者）であることは明らかだろう。つまりこれはミル自身のことである。では二回目の「彼」はどう

か。確かにこちらはゴールト氏のことを言っているようにも読める。しかしこちらもミル自身のことであろう。伊原訳もそのことはわかっている。なぜなら訳註にこうあるからである。

これはミルの思いちがいである。ゴールト（一七七九～一八三九。有名なスコットランドの小説家）の『教区年代記』は一八二一年刊で、ミルがそれを研究会の名に使ったのは「一八二二年から一八二三年にかけての冬」（ミル『自伝』）であるが、ゴールトの四十年前（一七八〇～八一）に、ベンサムがはやくもこの語を使っていた。

水田永井訳はどうだろう。

【水田永井訳】この論文の著者は、自分が功利主義的ということばを使用した最初の人間であると信じる理由をもっている。**かれ**はそれを発明したのではなく、ゴールト氏の教区年誌のちょっとした表現からそれを採用した。その数年間よび名として用いたあとで、**かれ**およびその他の人びとは、宗派的特徴をもった記章か合言葉ににているすべてを次第につよくきらうようになって、それをすててしまった。〔強調傍点引用者〕

水田永井訳は、律儀にも、二回とも「かれ」と訳しているようである。ほかの訳書でも「彼」としているものが多い。「彼」としていないのは、富田小倉訳、川名山本訳、関口訳である。また、訳者代表で水田永井訳の「点検と訂正」を行ったという水田洋氏も「改題」において、こう書いている。（この「改題」は、既訳一覧でいうＩ３以降のものである）

> なお、ミルがこの論文〔「功利主義」〕のはじめに、功利主義という名称をかれが発明したとかいているのは、あきらかにまちがいである。

揚げ足取りのようで申し訳ないが、水田永井両氏がそう訳したように、ミルは「それを発明したのではなく」、ゴールトの著作から「採用した」のである。

しかし奇妙な話である。ミルの話を信じるにしても、最初の使用者はゴールトのはずである。にもかかわらず、なぜミルは臆面もなく、自分が最初の使用者だと言ったのだろう。そもそも、この言葉を**発明した**のは自分ではないが、最初に**使った**のは自分である、という表現自体が不可解である。

この不可解な表現に惑わされたのだろうか。『功利主義論』を『利学』というタイトルで日本で初めて翻訳した西周は、「本論の著者」の後に、わざわざ「ベンサム氏を指す」との註記を挿入してしまっている。もちろん「本論の著者」とはミルのことである。

川名山本訳の訳註では、ジョン・ゴールト『教区史』の該当箇所が訳出されている。私もプロジェクト・グーテンベルクに公開された当該テキスト（The Annals of the Parish by John Galt https://www.gutenberg.org/ebooks/1310）を参照したところ、次の事実がわかった。ゴールトの当該著作に、utilitarian は一回しか使用されておらず、また「功利主義的」ではなく「功利主義者」の意味として、批判対象に対して使われているということである。英語の utilitarian は、文脈なしでは、功利主義者とも功利主義的ともとれるし、ミルがどちらかの意味に限定していたとは言えないが、ミルの「使った」が主に功利主義者協会（Utilitarian Society）という名称のことであることや、この註記の文脈から判断して、これは「自分が功利主義者を**名乗った**最初の人物である」という意味に解釈していいのではないかと考える。功利主義者という言葉の発明者はゴールトだが、自称として使った最初の人物は自分である、とすれば、この謎の一文の意味も通る。ちなみに既訳において、utilitarian を「功利主義者」と訳しているのは、高橋久則訳と柳田泉訳であり、関口訳が「功利主義的・功利主義者」としている。

と書いたところで、村井章子訳『ミル自伝』を参照したところ、功利主義者協会について語っている箇所で、「自ら『功利主義者』を名乗ったのは私たちが初めてであり、やがて広く使わ

れるようになったこの言葉の起源は、ささやかな私たちの会にあった」との記述を見つけた。原文で単に had taken となっているところを「自ら〜名乗った」としており、（『功利主義論』のほうは use であるが）これを「名乗った」「自称した」と解釈するのは私の独創ではないようである。ただ、村井氏は「私たち」としているが、この直前の文章からして「私」ではないかと思う。直前の文章は、"... the name I gave to the society I had planned was the Utilitarian Society."「私が計画した会に私が与えた名前は、功利主義者協会だった」（拙訳）。

ところで、和田訳は「あとがき」で率直にも次のように述べている。

> 一体功利主義なる名称はヂョン・スチュアート・ミルによつて流布され、その後たえず用いられているが、ミルはそれを自分で創造したのではなく、小説家ゴールトの「教区年代記」（一八二一年）からとつたといつている。しかしベンサムがそれ以前に二度も用いているのであるから、ミルはベンサムの著作のなかに発見することができたはずである。

二度も用いているとは、おそらく、関口訳が「訳注」で記述している、次の事実のことであろう。

『オックスフォード英語辞典』は、一八二一年のゴールトの用例を示すとともに、それ以前にも、utilitarianという言葉が「功利主義者」（一七八一年）という意味で、また、「功利主義的」（一八〇二年）という意味で、ベンサムの書簡で使われていたことを指摘している。

一七八一年の用例はジョージ・ウィルソンに宛てた手紙の中で使用されたもので、一八〇二年の用例はデュモンに宛てた手紙の中で使用されたものである。いずれもベンサムが人に宛てた手紙の中であったから、ミルは発見できなかったのかもしれない。むしろ興味深いのは、このうち一度目の、一七八一年にジョージ・ウィルソンに宛てた手紙では、ジョセフ・タウンゼントを指して「彼は功利主義者である」という意味で使われているところである。ここでの使用もやはり自称ではない。ミルの言明は、功利主義者という言葉の発明者こそ不正確ではあるが、最初に自称した人物が自分であるということであるとすれば、その部分は事実なのではないか。

【拙訳】本稿の著者は、自分が功利主義者を名乗った最初の人物であると考えている。この語は私の独創ではなく、ゴールト氏の『教区年代記』のちょっとした記述から採用したものである。私は友人たちとともに、数年間、功利主義者を名乗っていたが、党派性を示すしるしか、合言葉と化してしまうことを嫌って放棄してしまった。しかし一派の意見ではなく、ひとつの単なる意見の名称というのなら、あるいは、なんら特殊な適用方法を示すのではなく、功利の基準を認めることを示すためなら、その用語は言葉の不足を満たし、多くの場合、退屈で冗長な言い回しを避ける便利な方法を提供してくれる。

プライドと傲慢

このページはサンプル版に含まれません。

訳し落とし？

このページはサンプル版に含まれません。

反論を余計なものとする？

このページはサンプル版に含まれません。

人生の明白な害悪とは？

このページはサンプル版に含まれません。

消極的かつ積極的に

このページはサンプル版に含まれません。

大部分の有徳な人？　最も有徳な人？

このページはサンプル版に含まれません。

滑稽な憶測とは？

このページはサンプル版に含まれません。

何を奪う（損なう）のか？

このページはサンプル版に含まれません。

良心の権威

このページはサンプル版に含まれません。

自発的な抽象化とは

第三章　第10パラグラフ

まずは川名山本訳から見てもらいたい。

【川名山本訳】社会という状態は人間にとって自然であるとともに必要でもあり習慣的なものでもあるので、何らかの例外的な状況におかれたり自発的に抽象化してみた

りすることによらないかぎり、人はこの集団の一員でないということを想像することはけっしてないだろう。

「自発的に抽象化してみたりすることによらないかぎり」とは何だろうか？　「自発的に抽象化」すると、人は自分を集団の一員と想像しなくなるのだろうか。おもしろいことに、関口訳、伊原訳、水田永井訳が揃って同様の訳出を行っている。「自分から進んで抽象的な考え方をしてみるといった場合を除いて」（関口訳）、「意識的に抽象を試みたりしないかぎり」（伊原訳）、「自発的な抽象の努力によってのほかは」（水田永井訳）といった具合である。

では、原文を参照してみよう。

【原文】The social state is at once so natural, so necessary, and so habitual to man, that, except in some unusual circumstances or by an effort of voluntary abstraction, he never conceives himself otherwise than as a member of a body;〔傍線引用者〕

「自発的に抽象化」と訳されているところが、"voluntary abstraction"だとわかる。確かにどんな英和辞典にも、"abstraction"は「抽象（化）」と書かれているのだが、例えば、『プログレッシブ英和中辞典』には4番目の意味として「放心,うわの空;没頭;脱俗」とある。「脱俗」とは聞き慣れない言葉だが、「世俗から抜け出る」という意味らしい。和田訳と富田小倉訳はこの訳語を選んでいる。

【和田訳】社会生活は人間にとつてはきわめて自然であり、必要であると同時に、まつたく習慣となつているので、異常な事情のもとにあるとか、故意に脱俗しようと努めるとかというばあいいがいには、人間は自分を団体の一員としてよりほかに考えないものである。

【富田小倉訳】人間にとつては社会的生活状態が極めて自然であり、極めて必要であり、且極めて慣習的なものである故に、異常なる境遇に在らざる非り〔ママ〕、又故意に脱俗遁世を企てざる限り、人間は団体の一員としてより外（ほか）に自分を考へることは出来ない。〔ルビ引用者〕

文脈から考えても、「自ら進んで世俗を離れ、隠遁生活をする」といったような意味と解すべきと思われる。河野訳は「自発的の孤立の努力」としており、これに近い。柳田訳は「意識的の出離作用の力」、高橋久則訳は「故意に忘れようとする」、高橋穣訳は「故意に抽象的なる思想的努力」としている。

【拙訳】社会状態は、人間にとって、とても自然で、とても必要で、とても慣習化されているので、異常な状況や自ら隠遁しようとするのでもない限り、人間は自分自身を集団の一員として以外には決して考えない。

Neither　何と何がないのか

このページはサンプル版に含まれません。

権利が forfeit されたのかもしれない

このページはサンプル版に含まれません。

有害な制度に抗しうる唯一の手段とは

このページはサンプル版に含まれません。

Worthiness

このページはサンプル版に含まれません。

以上、訳者なりに気になったところを列挙した。最後に断っておきたいのは、本稿は、重箱の隅をつついて、枝葉末節の誤訳をあげつらうことにあるのではない。もしそう読まれたら、偏に私の筆力のなさに起因する。また既訳を参照することができなければ、私の翻訳は一歩も進むことができなかったであろうことを特に強調し、重ねて感謝の言葉を述べておきたい。また、細心の注意と努力を重ねたが、訳者の浅学非才故に誤りが多々あるかと思われる。是非とも読者諸賢の教示を願いたい。

こうりしゅぎろん
功利主義論

著者　　J.S.ミル
訳者　　奥田伸一
2022年7月22日　初版発行
Ver. 1.01

発行所　八不
発行者　花村徳之
E-mail: hap2022info@gmail.com
Twitter: https://twitter.com/hap2022info

これはサンプル版です。
是非とも製品版をお買い求めください。